

(3) 鼻眞と裏切り

学校の授業に苦勞することはなかった。学業成績証は残っていないが、図画や体育などの実技はいざ知らず、それ以外の教科では筆頭の成績だったろう。当然、先生からの覚えもめでたかった。加藤は「プロテジェ protégé」と書くが、周りの級友からすれば「鼻眞」されていたのである。ことに4年生の理科の松本先生が担任のときには幸せだった。級友たちが休み時間に校庭に駆け出してゆく代わりに、実験教室に残って「蛙の心臓の脈拍を見つめ」、先生との理科談義を楽しんだ。ここでも町の子どもたちとは交われなかった。

そんなとき、小さな事件が起きた。児童に優しい先生につけこんだ、いわば集団校則破りで、小学生といえどもよく起きる些細な事件である。つけこまれた先生は怒り、全員への事情聴取が始まった。ところが加藤の番が廻ってくると、先生は加藤に「助け舟」を出した。加藤は一瞬迷った挙句に、その助け舟に乗った。

「おまえはよろしい、もう行ってもよい」という声を、そのとき私はほとんど聞いてはいなかった。解放されて歩み去るときに、私が背後に感じたのは、一列に並んだ同罪の生徒たちの視線だけであった。その見えない視線は、私の嘘を非難していたのではなく、裏切りを軽蔑していた。同時に、私は自分自身を軽蔑し、激しく自分自身を憎んでいた。(『羊の歌』「優等生」)

そして、「その後、私は何度も、(中略)教師と馴れ合った私自身に対する憎悪を、思い出した」と書くように、このありふれた小さな事件に、加藤の心は大きく傷ついた。公的なことで「裏切りたくない」という気持ちは、加藤がもちつづけた想いである。こうして憲法九条

を護持するひとつの理由として「親友を裏切りたくない」ことを挙げるのである。